
IS - インフィニット・ストラトス - 伝説を継ぐもの

劉輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 伝説を継ぐもの

【Nコード】

N6695T

【作者名】

劉輝

【あらすじ】

今田三成が世界を救った20年後のこと、三成は生きていた。ロシア軍の対テロ部隊に所属していた三成は一つの手紙により、IS学園に入ることになった。

三成を主人公のドタバタバトルラブコメ！

1話「新たな伝説」（前書き）

どうも、劉輝です

今回は三成視点でお送りします。

1話「新たな伝説」

それは、俺『いまだみつなり今田三成』が世界を救った20年もの後のことだ。

「ああ、ここらはクリーチャーも少ない
すぐに叩けるだろう」

「じゃあ、私たちは…？」

「お前らはアフリカの守備についてくれ
装備品はあとで俺がそろえておいてやる」

「わかりました」

俺は手に書類を持ち、外に出る。

俺は今、バイオテロ対策部隊『エンジェル・ハーツ』に属していた。
あれからの俺は、なんとか生き残れた。だが、世界のクリーチャー
を壊滅させたが、それは一時的なものだ。

なぜなら、クリーチャーは元々はウィルスで作ったもの、そのウィ
ルスがブラックマーケットに流質したことにより、テロ組織がそれ
を買い占めてしまい、今やクリーチャーはテロリストの武器となっ
ていた。

俺はそのテロを止めるため、日本を離れ、ドイツに行った。そこで
軍事的な方針を手伝い、かつ軍師として活躍していた。

「おう、英雄さま」

「その呼び方をやめると何度言ったらわかるんだ
『テラ・シング』少佐」

「まあまあ、そう言わず
どうだ？タバコ吸うか？」

「未成年だ」

「何言つてんだ！お前もう36歳だろうが！」

「呪いのせいで今は18だ」

俺の体は、あの石田三成が体に入って来てしまったせいで、人間の限界を超えてしまった。

歳の10年に一回しか歳をとれなくなり、人間との戦いでは1000人を相手にしても勝てるような体だ。
まったく…これでは日本に帰れないのがわかるだろ？

『帰れば良いではないか』

人の体に寄生しているお前に言われるとものすごい腹立つ。

『人のせいにするでない』

いいからしゃべんな。

「しかし、まだ信じれんな〜呪いだなんて」

「ああ、俺もだよ

でも実際に顔にしわはあんまりできてないし、体は衰えないし…」

「そ、そんな悲しくなるような顔をしないでもらいたいのだが……」

しかたないだろうが…この20年もの間いろんな国を回ってきたが…
…どの国もあの女性しか使えない兵器インフィニット・ストラト
ス通称『IS』のことばっか！
おかげで前の…その前も…その前の休みもISのことばっか話題だ
ったため、頭痛を起こしてしまった。

『鍛錬が足りん』

だから、テメーは黙ってる！

「じゃあな、テラ

俺はこれから書類を書かなければならん」

「おお、そっか

止めてしまつて悪かった」

テラはタバコの煙をふかしながら去っていく。
なんだかな…あいつ、自由だよな…

『今田、俺達もそろそろ…』

「ああ、わかつてるよ」

俺は自分の部屋に戻った。

俺の部屋は書類の山だ。

後でちゃんと目を通しておかないと上司（上の人）に怒られるな…

『これが本当のちりもつもれば山となるってな』

「何を言つてんだ

つていうか、うまくもねーし」

えっと…こっちの書類は…

『IS学園募集』？

『今田、入ってみたらどうだ？』

「いやだよ

何で俺が…」

『いや、何でって…

貴様はISを動かせるではないか』

「たしかに動かせるが…大体はお前の力であろう」

そう、俺はISが動かせる。

それは、俺がいよいよ一回日本に帰ったことだ。

任務で俺は、潜伏していたテロ集団を鎮圧する時、部隊は半数がやられ、俺と10人ぐらいしかいなかった。そこに変な女に会い、プレスレットをもらったんだ。プレスレットを身につけるとプレスレットが光り輝き、俺の体の武装が機械の武器やアーマーに変わった。それから色々調べた結果、あれはISだと分かった。名前は

「仁…」

それが俺の専用機ISの名前だ。

仁…ねえ…仁徳がない俺に似合わない名前だ…。

『仁か…仁徳があるお前に良い名前ではないか』

真反対のことを言っているよ…こいつ俺と趣味が合わないあ…

「仁徳なんか俺にはない」

そう、仁徳なんかは俺にはない。

仲間の約束を破っている奴なんか仁徳なんか似合わない。

「そんなことより、書類を書かないと」

えつと…この書類は…『IS学園』って…あれ？

「この紙…さつきもあつたよな？」

『あつたな』

まさか…！

俺は書類を全て見てみる。

『IS』…『IS』…『IS』…全てIS学園の紙だった！
なんだこれは！新手のいじめか！？

「っ…っ…！」

「失礼します！三成さま！！」

「誰だあ…！！同じ紙を届けた奴は…！！」

「…！！？（ビクッ）」

「ハア…ハア…」

「し…失礼…します…」

おっと…いけねえ…

「す、すまん…で、何だ？」

「こんなものが…」

渡されたのは一枚の手紙だった。

「ありがとう、下がっていいぞ」

「はい」

俺は手紙を受け取り、手紙を開ける。
そこには、日本政府の印があった。

「日本政府？」

『なんで日本が…』

「…これは一回日本に行く必要があるようだ」

　　次の日

マジで来てしまった……

『お前が行くと言い出したんだろうが』

「お前の言つとおりだ」

だが、今になってから後悔してきた。
我ながら情けねえ。

さて、まずはIS学園の関係者を探さないと。
え〜っと……
ドン！

「あ、すみません」

俺にぶつかってきた女の人に謝る。
さっさと立ち去ろう。面倒になる前に。

「ちよつと、あなた」

……ほらな……

女は俺の肩を掴み、無理やり体を180度半転させられた。

「あなたのせいで服が汚れたじゃないの！」

いきなりどなり散らしてくる女
今の世界はこんな感じだ。

なんでも女性が優先的、理由は言うまでもなく、ISのせいである。
っていうか、ほとんど逆ギレだろ？

「何で俺が……」

「当然でしょ！？」

何がだよ……

「俺から当たったわけじゃないだろうが…」

「いいから、謝りなさい！」

「なんでだよ…」

「あのなあ…」

「そこまで言うなら、あそこの警備員に『いきなり暴力をふるわれた』って」

「どうぞ…ご勝手に…」

俺、軍の者だし…

「あつそ…！」

女は警備員と話、連れてきた。

あゝあ、どうなっても知んねえよ？

「君！彼女に乱暴をしたのか！？」

「してない…」

「嘘を言つな！彼女が言っていたぞ！？」

はあ…この警備員…下級兵か？

「君、名前、職業を言ってもらつ…」

その時、俺の目は輝いた。

効果音を付けるなら『キューピーン』だ。

「名前は今田三成」

「……（ピタッ）」

案の定、警備員が固まる。

「職業はロシア軍テロ対策部隊『エンジェルハーツ』所属、階級は軍師だ」

そしてぶるぶると震えだす。
よしっ！勝ったな

「も、もしか…あなたはあの20年前の事件での…!？」

「…どんな風にとられているかわからんが…俺はかまわんぜ？このまま俺を連れて行くんなら…ここで俺が連れて行ったら、あなたの首は飛ぶだろうなあ…あゝあ、かわいそう…」

「あがががが…!!」

「まあ、今の時代は男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代だ…
連れて行けよ…」

俺は手を差し出す。

もちろん俺の顔は今ニヤついている。

「いやいやいやいやいや!!結構です!!……!!」

警備員はまるで殺される直前に逃げだすゴキブリのように逃げた。

そして、残された女一人
さてっと…

「どうする、別に戦ってもいいぞ？
俺は生身で…」

「な、生身!？」

「ああ、ただし、俺は武器を使わせてもらっがな」

「い…いい度胸ね…いいわ、アンタはここで裁いてあげる!」

女の体にはISが転送される。

しかも完全に殺気を出してるよ。

しかたないなあ…石田、力を使わせてもらっぜ。

『あんまりやりすぎないように』

わーってるよ。

軽くつまむだけだ…アクセル2でいいかな？

「わかってるなあ…どうなってもしんねえぞ…」

アクセルモード
起動状態…開始…レベル2

ドッ！

「っ！？ひ、左の目が…光って…！」

「来いよ…石田三成の戦術、見せてやる」

「じよ、上等よ！やってやるわよっ…！」

女はISのブーストで俺との間合いを一気に詰め出した。
…が

「甘いな」

俺は瞬間的に女の後ろに回り込む。

「なっ…！後ろ…！」

「おらあ…！」

女に蹴りを入れるが、残念なことに蹴りは腕で守られた。
力が足りなかったか？

「な、なんて力…！」

おっと、驚きすぎだ。

俺の力はまだまだこんなもんじゃない。
俺は風呂敷に包んでいた剣を構える。

「来い、力の使い方を教えてやるよ」

1話「新たな伝説」(後書き)

次回はIS学園入学まで行きたいと思います。

番外編「主人公紹介」（前書き）

遅れてすみません！

今回のネタをまとめていたら遅れました！

とりあえず、主人公紹介です。三成くんは変わりました（いろんな意味で）

番外編「主人公紹介」

いまだみつなり
今田三成 （本名：石田三成）

18歳（本当は36歳）

20年前、世界をクリーチャーから守りぬいた歴戦の戦士。
ロシア軍でテロ対策部隊『天使の心』エンジェルハーツの軍師を務めている。
あることがきっかけでIS学園に入ることになる。

石田三成の力を持っており、その力はISをも拳で倒してしまうくらいである。そのせいで、ISが使える。他にも、石田三成の力のせいで10年に1回しか歳をとらない体になってしまった。

学問が得意で武術もお手のもの。成績は学問でトップ。武術も歴戦でさらなる成長をとげている。今の彼には、1000人斬りなどお手の物であろう。

性格は冷静。特に気に入った人。初対面の人には優しいが、気に入らない相手には毒舌を放つ。そんな性格なのに、なぜか彼の周りに人が集まってくる。特に極道の人が。

チャームポイント：蒼の右目と紫色の左目

髪型：男とは思えない綺麗な長い髪でポニーテール

バトルスタイル：ソード&ガン+スピア

武器：三成が自作した三成専用の武器

ソード：ガーディアンソード（元々はエンジェルハーツの隊員の武器なのだが、三成用に特注で作った剣である）

三成のアクセルモードにも耐えられる特殊の金属を使っている

ガン：右近&左近（三成が自作で作った二丁拳銃）

最大弾数は12発だが、破壊力は普通のハンドガンの2倍。
名前は三成が考えたもの)

スピア：志龍（三成が自作した折りたたみ式の槍。

中国の特殊な金属で作っており、どんな衝撃にも耐えられる。

名前は中国の英雄『趙雲』をイメージして志を貫く龍で志龍にした)

解説：ISのシールドを壊せる（壊せるというより、展開能力を消す）特殊な能力を持っている。そのため、周りはシールドが展開していないように見える。

武：1000/920

知：100/100

専用IS『仁』武器

ソード

スピア

ハンドガン

ショットガン

マシンガン

性能：三成のアクセルモードで力が変わる。

後付け装備が可能の万能型。

スーパーブースト

超移動が使えるが、3回以上使うと肉体に負担がかかり、吐血してしまう。

解説：元々は束が作っていた第四世代のISだが、テロに盗まれる。三成がそのテロと戦っていた最中謎の少女から受け取る。
仁徳あふれる者しか使えない。

称号

【第二のISを使える男】

世界でISを男で使えるその二人目。

【ツンデレ軍師】

いつもはツンケンツンケンしているが、時々デレる。結構貴重なことだ。「べ…別に俺は…フン！」

【極道関係者】

軍の人でありながら、極道絡みの人！？だが、頼りにされています。

【唐変朴オブ唐変朴ザ今田三成】

女の子のアプローチにも気がつかない鈍感男「は？仲間なだけだ」
女の子は結構傷つきますよ？

【石田三成】

それは、仁徳に溢れた仁義の人「俺と共に来い」彼に手をさしのばされれば誰でも手を取るであろう。

【二丁拳銃、今田三成】

ISでも生身でも二丁拳銃。その銃さばきに手が出せない！？

【IS学園年長者！？】

18歳っていつても、もう36年も生きてきた人です。人生相談なんていかがですか？

番外編「主人公紹介」（後書き）

お疲れさまでした！

コメントもよろしく願います！

2話「親父の心配は迷惑な時もある」

時は次の日になる。

「今日からここに転校してきた今田三成だ」

そう、俺は今ISS学園にいる。
えっ？あれからか？

「昨日」

「来い、力の使い方を教えてやる」

「まてまてまてーい！」

「『えっ？』」

まさに、俺と女が戦う直前であった。俺達の横から政府の人がやってきた。

「な、なんだ？」

「『その馬鹿ツラの男！』」

「『誰が馬鹿ツラだあ！』」

「『いいから！こっちです！』」

俺はそのまま手を引つ張られていった。

女はポカーンとした顔で見ていた。

後から聞かされたのだが、俺の義理の父親、今田信也はクリーチャ―対策部隊をやめ、政府の人間になったらしい。

そこで、俺の新しい任務が言い渡された。

それは…

『3年間、IS学園にいろ！』

しかも強制だ…やれやれだ。

ちなみに、組織はレイが後を引き継いだらしい。

「とにかく…」

まずはこの教室から抜け出したい…

さつきから女子どもが俺を見ている。

それはそうであろう。なぜなら、この学園にいる男は俺、『今田三成』と…俺の隣りにいる『織斑一夏』だけだ。

「（まさか、俺以外にもISを男で使えるやつがいたのか…）」

『新聞を読めば良いのにな』

「（部隊の仕事で忙しかったんだよ…）」

「それでは、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

そんなものがあるのか。まあ、俺は面倒だから名乗りあげんが。

「ふふっそのような重要な役目はこのエリートのわたくしでなければ務まりませんわ！」

おうおう、なれなれ、俺は一切かわりたくない。

「はいっ、織斑くんを推薦しまーす」

「私もそれ思ってた！」

おゝおゝ、人気者だなあゝ。

「えっ！？俺が！」

「うんっ！だってこの学園の唯一の男子なんだし！」

「それを言うなら今田だって男じゃないか！」

「おいおいっ！俺に振るな！」

「あっ、そうだった」

おいおい！なんか俺が影薄いみたいになってんじゃないか！

「じゃあ、今田くん一票！」

「あたしは織斑くんに！」

わいわいとみんなは俺達に当選を進めていく。

「な、納得できませんわ！」

そこに、イギリスの体表候補生『セシリア・オルコット』が割り込んでくる。

「そのような選出は認められません！大体、男はクラス代表なんて恥曝しの何ものでもありませんわ！」

「フン…言ってくれるぜ…」

「いいですか！？クラス代表は実力トップの私になるべきですわ！」

「フン…どうやら…この学園には、自分のことをよくわからん凡愚ほんぐが多いようだ…」

俺は笑みを浮かべ、挑発的態度で言う。

「な、なんですって！？」

「大体、お前が実力が高いにしろ、お前が最強だということではない。

それに、実力なんてただの肩書……やった時の結果が大事なんじゃないか？

それを、戦ってもいないのに自分の方が上だの、お前みたいに自分が優れているとか言う凡愚が増える…嘆かわしい時代だ…」

「~~~~っ！そこまで言うなら、私と勝負しませんこと？」

おっ、ついには怒りに任せて勝負を言い出したか。

「いいだろう。四の五の言うよりは言い」

「あなた偏差値低いのでは？」

「フン…馬鹿か、俺は気に入らない相手は徹底的に叩くのが好きなんだよ」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。今田と織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

「……って、あれ？俺も？」

「当たり前だ」

千冬先生の言葉を聞き、肩をガツクリと落とす織斑。
「って言うかそうだろうが。お前も当選者の一人なんだから…」

こうして俺はIS学園1日目を終えた。

「ハア…ハア…」

俺は今、自分の部屋の番号が書かれた紙を片手に歩いていた。
だが、俺も足はフラフラと安定せず歩いていた。なぜなら…

「こ…こ…か？」

ガチャとドアを開ける。

「よいしょっと！」

そして部屋に俺の荷物だと言われた鞆4個、アタッシュケース7個

を部屋の中に入れる。

「って！俺は乙女かああ！！なんで鞆4個お！？なんでアタツシユケース7個お！？意味わかんねえよ！大体なんで俺の荷物を義親父が用意すんだよ！どんだけ心配症なんだよ！」

「……と一人で愚痴っててもしかたねえ……とりあえず、中身を見よう。ガサガサ……」

なにに？服が12着……薬が7個……世界を知ろう！の本……俺のノートパソコン……軍用サバイバルナイフ……終了

「ってこれだけかよ!？」

どうやらこれがあと2個の鞆に入っているようだ。

あとはアタツシユケースだな。

ガチャ……

銃の弾がたんまり入っている。

こっちは？

ガチャ……

またしても銃の弾……

そっちは……

ガチャ……

「弾ばつかじゃねえか！」

（2時間後）

「はあ……やっと荷物の整理ができた」

『お前の親父さん……何と云うか……すさまじいな』

おう、うっとおしいほどに……

『おい、ケースがもう一個あるぞ?』

「何だ、まだあったのか…」

どんだけあるんだよ…

ガチャ…

ん?何だ、これ。

最後のアタッシュケースの中身は銃弾ではなく、四角い機械だ。よく見ると手紙もある。

『我が息子よ！

異様に暑苦しいな…

その機械はお前の武の腕が落ちないように作ったバーチャル訓練機！敵などをリアルに出し、まるで本物の人間と戦っているような感覚で戦える機械だ！しかも、これは自分がいままで出会った人や戦った人のデータを自分の脳の中からこの機械に送ることができるんだ！

つまり、俺が戦ってきた相手のデータをこの機械に送れるってことか…

ちなみに！何人でも参加は可能だ！だからお友達とできるぞ！では！また今度会おう！

PS：たまには顔を見せろ！このツンデレ軍師！
今田信也』

「
……」

カチッ
…

俺はポケットからライターを出し、その紙を燃やす。紙はすさまじい勢いで燃え上がる。そう俺の怒りのように。そして、夜は明けた。

2話「親父の心配は迷惑な時もある」(後書き)

次回は一夏とのISの訓練。
お楽しみに！

3 話「東城会、真島組組長 真島吾郎！」

「お願いだ！一緒にISの訓練をしてくれないか！？」

「…はっ？」

それは、次の日だった。

俺はいつも通り朝食を食べていた時、織斑が突然やってきたのだ。つていうか、敵に頭を下げんなよ…

「待て待て！まずは頭を上げろ！見苦しい」

「あっ…す、すまん」

「まずは事情を聞こうか？」

「あ、ああ…実は…」

どうやら織斑はISを操縦の仕方がほとんど知らないらしい、そこで俺にISの訓練をしてほしいというわけらしい。

「……まずは体を動かす訓練だな…」

「て、手伝ってくれるのか！？」

「あ、ああ…」

ガシッ！

織斑は俺の手を掴み、泣きながら礼をする。

「ありがとう！」

「べ、別に…俺はただ…自分の訓練のついでにと思ったただけで…」

俺はそんな変な言い訳を言ってしまった。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ！」

「今田三成だ。三成でいい」

俺達は互いに握手する。

今思うと、俺はつくづく変に人が集まるようだ。

「今田」

そこに、電話の受話器を片手にした千冬先生がいた。
いやな予感しかないのはなぜだろう…

「なんでしょうか？」

「お前に電話だ」

誰からだ？

「お前、極道の者なのか？」

「えっ！？」

一夏よ…まに受けるなよ…

「んなわけねえだろ！ちゃんとした正式のロシア軍のテロ対策部隊の軍師だ！」

「そうか、それならいい」

「まったく…いきなり変なことを…ん？極道…？まさか！俺は千冬先生の手を持っていた受話器を取る。」

「もしもし」

『よう…久しぶりやな…みつちゃん…！』

「真島さんか！？」

『えらい久しぶりやな…！あれからもう4年か？』

「ああ、あの時は世話になったよ」

『実はのう…お前に知っておいてほしいことがあったの…』

「はあ…？」

『今、神室町で起きとる事件知つとるか？』

「あ、ああ…」

今、神室町で起きている事件。それは、東城会の組員が次々と正体不明の人物に病院送りにされているのだ。なぜ、東城会が狙われているか、それはわからない。警察も動いて

いるが、正体不明のため、わからない。だが、その現場を見たやつはこんなことを言っていた。

『大きな体をした大男で、手には大きな槍を持ち、鎧を身に付けた男』

「それが俺とどう関係されてんですか？」

『実はのう、ついさっき病院で目エ覚ましてのう、その大男がこんなことを言っていたらしいんや』

「何と？」

『石田三成を知らないか？』

その言葉を聞き、俺は少し寒気を感じた。

『石田三成って言ったらお前の本名やろ？お前、誰に喧嘩を吹っ掛けたんや？』

んなことわかるかよ…俺にだってわけがわからず、混乱しているの

だから。

『まあ、気い付けえや、今度、様子でもうかがいに行くわ』

ブチ…プー…プー…

俺は受話器をテーブルに置く。

その大男は何で俺を探しているのか。そして、その大男は誰なのか。わからん…

「み、三成？」

「あ、ああ…じゃあ、放課後にISの特訓するか」

「だ、大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ」

本当は大丈夫じゃないが…

くその放課後く

俺は剣道部の部屋を貸してもらい、一夏を待っていた。

それにしても、ここまで簡単に交渉がすむとは思わなかった。

俺が部長に『ここを貸してはもらえないだろうか？』と言ったら即座にOKが出た。

「うーん…日本も変わってきたのか？」

『…………お前は変わってない…』

「何か言ったか？」

『別に…』

「???わけわからん。

それにしても、一夏は遅いなあ。

しかたない…『あれを』を出すか。

それは、俺の義親父が送ってきたバーチャル訓練機だ。
セットをし、起動。

『よう！我が息子よ！』

「ってお前かよっ！！！」

何やってんだこの馬鹿義親父は！本当に仕事してんのかよ！なにナレーションしてんだこの馬鹿！

「…今度あの人の上司から色々聞いてみようか…」

結構仕事してなかったりしてな。

まあ、そんなことはどうでもいいとして…とりあえずデータはもう転送してあるし…軽く300人斬りいくか。

ポチ…ブン！

俺の目の前には剣を持った兵士たちの姿が現れる。

「めっちゃリアルじゃねえか…」

特に剣なんか切れ味がよさそうならめきが見える。
だが……！

「相手にとっては不足はない……!!」

その頃、三成を待たせていた一夏はというと…

「一夏！私が特訓に付き合つと言っているのだ！」

「箒…今日は人を待たしてるんだよ」

「しかし…！」

「そつだ！箒も来いよ。お前と箒は気が合いそつだ！」

「み、三成…？誰だ？」

「いいから！行くぞ」

一夏は箒の手を取り、半ば強引に剣道部に行く。

「ここに三成がいるんだ」

「……」

『うらあああー!!!!』

「えっ…!!」

いきなり大声にびっくりする二人。

「……なんだ？こんなもんか……」

辺りはさっきまで本当に殺し合いがあったみたいに辺りは死体が転がっており、血が所々に散っていた。そのまるで地獄絵図の中、三成は一人立っていた。

三成は顔に付いた血を服の裾で拭う。

「三成！」

「こ、これは……！」

そこに先ほどの三成の声に駆けつけた一夏と箒が入ってきた。もちろん二人は今の状況が飲み込めず、ただただ辺りを見回す。

「み、三成！これ……これどうなってんだ！？！」

「ああ、いいところに来たな」

「なにをのん気に……！」

「いや、バーチャルなのに血が服に付くなんてびっくりだぜ」

「「ば、バーチャル……？」」

「ああ、まるで本当に戦っているような感覚でいられるバーチャル

訓練機。主には戦の前のウォミングアップなどで使われるらしい」

「（どこにそんな物売ってあるんだろう…）」

ピッ

三成が装置を切ると辺りの死体や血が消える。

さて、あらためて…

「一夏…そちらさんは？」

「ああ、忘れてた…幼馴染の篠ノ之箒」

「篠ノ之箒だ。以後、よろしく頼む」

「今田三成だ。三成でいい」

なんだか気が強そうだな…

部隊にもこいつみたいなのがいたな…

「そういえば三成って変わった名前だな」

「そういえば…由来はなんだ？」

よく言われるが…こいつら20年前の事を知らないのか…まあ、知

っていてもどうしようもないがな。

「この名は……今から……昔の話だ……」

俺は空を仰ぎ見るように天井に目をやる。

「って……この話をするとう長くなる……また今度……な」

「そっか……じゃあしかたないか」

「うむ、そうだな」

二人とも聞き分けがいいみたいだ。よかったよかった！

「そういえば三成、朝の時の電話の相手誰だったんだ？」

「ああ、あれは東城会の真島さんだ」

「と……とうじょうかい……？」

「ああ。まあ、しいて言うなら『極道』だ」

「……えっ？」

二人はあ然としている。

まあ、そうだよなあ……誰でも極道と知り合いの奴が身近にいるなんて驚くよなあ……

カツ…カツ…カツ

「うん？」

靴の音？

「いつひっひっひ…みつちゃん。変な言い方すなや！」

ドアの前にいたのは蛇柄のジャケットとテクノカットと左目の眼帯がトレードマークで、東城会若頭補佐、直系真島組組長として堂島大吾を支えてる真島組組長。

「ま、真島さん！」

「よう、会いに来たで〜！」

「会いに来たって…朝に電話したばかりじゃねえですか！」

「いいやんけいいやんけ！」

いいやんけって…

うん？今考えたら真島さんは何の用でここにきたんだ？

「真島さんは何しに来たんですか？」

「あ、ああ…実はのう……六代目のう…」

真島さんの話からすると俺と電話をした後に、六代目から俺を護衛するように言われたらしい。なんでも…神室町での事件のあの『極道狩り事件』でのことらしい。

「ということなんや」

「大悟さんも心配症だなあ…なんか、俺の力を見くびられてる気分だぜ」

「そう言つなや。六代目は六代目なりに心配してんやから。むしろ感謝せーや」

「どうだか…」

「いい人ではないか」

と隣りの筈が言う。

軽々と言ってくれる…

「だよな。三成のことを思ってやってるんだから。それは、三成に人望があるしるしだと思うぞ」

まあ、ありがたいていつたらありがたいが…

「わかった！よろしくお願いします……真島さん」

「おう！」

「ところで、真島さんはどこで俺を護衛するんですか？」

「おう！学園でや！」

あゝそうそう。学園でなんだ。それはそれは……

はっ？

「ってことは学園にいるつもりですか!？」

「おう、そうや」

いや、そうじゃなくて…

「すでに許可も出とる」

「ウソー!!?」

「そんなわけで、よろしゅうな!」

俺は肩をがつくしと落とした。毎日である。
毎日真島さんに監督される…

絶対疲れる!!!

3話「東城会、真島組組長 真島吾郎！」（後書き）

やってしまった感が強く出てきました！

真島の兄さんのパラメーター（強さだけ）

←
←
←
←

真島吾郎
まじまじろう

武力：1000 / 780

知力：1000 / 500

4話「襲来」

真島さんの監督2日目

朝の光が射す清々しい朝にまず俺の睡眠を邪魔する存在がいる。

「zzzzzz」

ガチャ

「みつちゃん！朝やで」

この人、真島さんである。

「ほら、朝やでー！楽しい楽しい学校の時間やでー！」

楽しくねえよ……

たのむ、俺の楽しい睡眠時間を邪魔しないでくれ……

「……はよ起きんとお前の姉さんに電話してやるで……」

さーて！今日は清々しすぎて怖いくらいの朝日だぜ！
いやあーこれから楽しい学園だあー！

真島さんも電話片手になにしてんのかなあ!?

「おはよう!真島さん、いやあ〜いい朝っすねえ!」

「……フツ……」

そして、真島さん笑みを浮かべながら携帯を収める。

はあ……今朝から疲れた…。

俺は食堂で朝食を取っている。俺の隣りには真島さんがカレーを食っている。

ちなみに、俺が食っているのは朝の日替わり定食。今日はだし巻き玉子がおかずだ。

「真島さん…」

「うん、なんや?」

「朝からカレーって胃がもたれねえですか?」

「甘いの〜、朝は体力使うから食うんやんけ!」

あんたは動くことねえだろ!

まあ、こんな感じだ。

「……………」

「どうした三成？眼の下にクマができてるぞ？」

そこに、一夏が現れる

「ん？うん……大丈夫…ドーナツ作りに失敗しただけ…」

本当は真島さんの話を昨夜に遅くまで聞いていたからなんだが…
とうの本人は…

「いや〜やっぱいいのう！飯を食うのは」

あんな元気にいる。

このままでは俺は不眠で倒れる恐れがある…

「うん！メシは生きる活力になる！いいもんや。な！みつちゃん」

「あ、ああ……」

「あゝ…なるほど」

一夏も納得してくれたらしい。

とにかく…六代目に言わないと…

そうと決まればと俺はさっさとメシを食い、一回寮の廊下に行く。

「どういふことですか…なんで真島さんを送ったんだ…六代目」

「三成さん…こちらあなたを失いたくはないのです。どちらかというと感謝をしてほしいですね」

「心づかいはうれしいが、人の睡眠を邪魔されるような人に感謝をしるなんて難しいことを言ってくれるな」

「そのかんに関してはすみません…あの人は一度話し出すと止まらなくて」

たしかに…

この数日真島さんの話がストップしたことがない。
あの人はつくづく読めんな。

「しかたない…今度何か奢れよ」

「ははは…勘弁してください」

六代目は苦笑いで言う。

「じゃ、近いうちに神室町に顔でもだすよ」

ピッ

俺は久しぶりに六代目と話したせいか、顔がほころんでいた。そんな顔を直すため、パンパンと自分の頬を叩く。

「いけねえいけねえ…」

『フン…』

何だよ…

『別に…久しぶりに貴様の面白い顔が見れたと思ってな』

なんだそりゃ…

石田も変なことを言うようになった。

俺はそんな石田の言っていた意味を考えながら教室に向かった。

くその頃

それは、三成がいる街のはずれのある廃ビルのこと。

「そうか…まだ見つからないか…」

『ああ、三成はもしかしたらこの神室町にはいないと思う』

「そうか…しかたない、お前は戻ってこい…」

『いいのか？もしかしたらまだ神室町にいるかもしれないぞ？』

「心配すんな…そっちには【華陀】を行かせる。

それに、奴の居場所はまだわかってる。

【呂布】お前はなにも考えずにまっすぐ帰ってこい。」

『へいへい…土産何がいい？』

「んじゃあ神室町雪月花のCDを…」

『わかった』

男は携帯を切り、机に置く。

「……………石田…三成…」

男は三成の写真をナイフで刺し、真っ二つに切り捨てた。
男は不気味な笑みを浮かべ小声で言う

「さあ……………混沌の時まであと少しだ…」

真島さんの監督3日目

俺はもう限界を超えていた…なのでなるべく部屋に戻らず、寮内な
どを意味もなくウロウロするのが日課になり始めた。

ぐうゝ

そういえばまだ夕食まだだったな。
食堂にでも行くか。

「……………はあ……………」

食堂にはあのイギリスの代表候補性『セシリア・オルコット』がいた。

彼女は、一人でサンドイッチを食べていたのだが…

「（なんだか食が進みませんわ…あの今田さんの事を考えるだけでモヤモヤしてしまいますわ…）」

そう、彼女は三成の事を考えていた。

「（たった一度話しただけなのに…なのに…あの人（三成）の事を考えるだけでなんで…）」

「よう…オルコットよ」

「っ！…!?!?」

そこに、セシリアの目の前三成がいた。

俺はたまたま食堂にいたオルコットに話かける。
少し話すことがあった。

「隣りいいか？」

「えっ…ええ…」

俺はオルコットの隣りに座る。

「…」

案の定会話はなくなる。

「あのだな」

「は…はい」

「すまなんだな」

「えっ？」

「この間大人げないことを言った。」

俺は人を不快にしまおうようだそれが大事にしたい人でも」

「そ、それは……！」

「……／／／／」

俺はなんだか気恥しくなり、そっぽを向く。

「だが、これだけは言う。

想いは力に勝り、実力だけを頼るやつはいつか地の底に落ちる」

「……」

「ま、まあそれだけお前は自分を信じている。それはいいことだ……！」

なに変なこと言っているのだ俺は！
もつと気恥しくなったではないか！

「そ、それではな！」

俺は逃げるようにその場を離れた。

逃げたといっても本当に逃げたわけではない！かといって逃げるのは恥ではない！むしろいいことだ！！

三成が去って10分セシリアは満面の笑みでいた。

「（ああ、なぜだか知りませんが、あの人があんなことを言うてくれてすっきりしましたわ）」

さっきまで食欲がなかったのがウソみたいにサンドイッチをもくもくと食べる

「（……………これが…恋というものののかしら？）」

どう行けばあれが恋になるのかわからないことをセシリアは言う。
この時、セシリアは今田三成に恋をしたのだ。

くそっ…！

変なこと言ってしまった！恥ずかしすぎるわ…！

『くふふふ……………ははははは…！』

笑うんじゃねえ…！

『おまつ……………お前が他人を説教じみたことを言うなんてなあ…！』

クソッ……………！これほどにこいつが腹ただしいと思ったことはない！
俺は今、風に当たるため外にいる。真島さんは今頃寝ているであろう。

『しかし、本当に面白い物を見せてもらったよ』

「ま。最近のガキはこうしていったほうがいい」

そして皆は思うだろう……諦めなければ奇跡は起こるって

……

今日はいいい風が吹いているな…

『！？』

今田！上から敵襲だ！」

「えっ！？」

上を見るとそこにいたのは刀を持った男が刀を振り上げてきた！

「おわっ！」

俺はすぐにその場から離れ、敵の斬撃を回避する。

「てめー……誰だ？」

「……」

男はニヤツと不気味な笑みを浮かべた。

4話「襲来」(後書き)

セシリアが変なことになってしまいました！
すみません！！

次回は

あの中国の武将VS三成です！

5話「六代目の負傷」

「お前は誰だ！」

俺は銃を出し、銃口を男に向ける。

「よく聞いてくれたあ！俺は【猛獲】！中国の南蛮王『猛獲』の子孫じゃ！！」

「も、猛獲！？」

猛獲とは、中国の蜀の地の南方にある南蛮（現在のミャンマー北部）の王。

蜀の劉備が病死すると反乱を起こしたが、諸葛亮に7回負けて7回解放してもらった。

その後、猛獲は反乱に失敗する。

「……とかいうあの？」

「さっきの説明を聞くかぎりろくな武勇伝ではないっ！」

だって、猛獲のことあんまし知らないし、ろくな話聞いたことないと思う。

「んなことどうでもいい！何で俺を狙うんだ」

「それは、兄貴のためだ！」

男はまた斬りかかる！

「くっ…！」

俺はとっさに銃で斬撃を受け止める。

「クソが！やっぱり東城会の六代目さんみたいにはいかんか！」

「どつという意味だ！？」

刀を振り払い男から距離を取る。

ピピピ

すると、俺の携帯が鳴る。

「どつぞ…出てくれ……」

「そうか？んじゃあお言葉に甘えて…」

ピッ

「もしもし…」

『み、三成さんですか！？私東城会の者です！』

「どつした……？」

『六代目が……六代目が撃たれました！』

その言葉を聞いた瞬間俺の体に衝撃が走った。

大悟が…？

『いきなり神室町ビルのセレモニーで銃声がしたと思ったら六代目

が腹から血を出しながら倒れたんです！
六代目は今、病院にいますが、意識不明で……！」

俺は無言で携帯を切った。

「……………か……………」

「あん？」

「大悟を撃ったのは貴様が……………」

三成は左眼を光らせ、猛獲を睨みつける。その目は鬼の形相と言っているだろう

「まあ……たしかにやったのは華蛇だが、俺がやったわけでは……」

ギン！

三成は猛獲に向かって突進。剣を振り下ろすが、猛獲は三成の斬撃を受け止める。

「変な言い訳してんじゃねえ！貴様だって組織の一人だよ……！」

「おいおい、だからって俺のせいにするなよ」

「うつせー！」

三成と猛獲の互いの剣がぶつかり合い、火花を散らす。

「大体！何で大悟を狙った！狙うのなら俺を狙えばいい！なのになぜ大悟を狙った！！」

「お前が知ることではない」

猛獲は三成の斬撃を回避し、間を取る。

「くらえ！」

猛獲はなにやら剣をおさめ、右手から気をためる。

「な、なんだ！？」

「フレイム！」

猛獲は右手から炎を出す。猛獲は三成に目掛けてその炎を投げる。

「な、なに！？ぐあああ！！！」

不意を突かれた三成は驚き、回避が遅れてしまい、三成は炎に飲み込まれる。

炎が消えると三成の体からプスプスと音を立てている。

「くっ…！い、今の一体…！」

『今田！やつは…！…！…！…！まさか、これが超能力とかいうや』

つか!？」

「ちがう…いくらヤツが超能力者だとしても、掌から炎を出すなんて不可能だ!」

「たしかに俺は超能力者ではない。これは…猛獲の力だ」

猛獲の力? どういう意味だ!?

「そもそも、俺ら子孫はある特殊な細胞を持って生まれた。その細胞は心の感情により、生まれる。

簡単に言ったら、細胞に卵があるみたいにな。俺らはその細胞を「能力細胞卵」って言う。

能力細胞卵は心の感情。怒り、悲しみ、などの感情で孵化をする。そして、人間とは思えない力を手にできるそれが…」

「アクセルモード?」

「その通り。そして、この能力細胞卵は5つの覚醒で分かれている。1つは一騎当千の力。

2つ目はアクセルモード。

3つ目は詠唱術」

「詠唱術……？」

「お前さんは見たところ2つしか孵化してないみたいだしまだ詠唱はできんだろう。」

詠唱術とは、さっき俺が出した炎みたいなものだ。ま、人によって火、水、風、土、などの詠唱術が使える。ちなみに俺のは獄炎の炎の詠唱術。」

「お、お前の様な子孫者が、なんで大悟を！」

「……壊すためだ……」

「えっ？」

なんだ？猛獲の声が小さくてよく聞こえなかった。

「おっと。タイムリミットが過ぎた。俺は退散させてもらおう」

「ま、待て！」

「それでは、これにてドロ」

猛獲は地面に何かを叩きつけ、煙を起こし、煙が消えると、俺の前から姿を消していた。

「くっそ……」

俺は、その瞬間視界は闇に包まれた

5話「六代目の負傷」(後書き)

コメントよろしくお願いします!!!!!!

番外編「キャラパラメーター&用語説明」(前書き)

どうも、キャラパラと用語説明です。

言い忘れていましたが、この作品は神室町が崩壊する前の話です。

それでは、どうぞ！

番外編「キャラパラメーター&用語説明」

まじまじ
真島吾郎

武力：1000/780

知力：1000/500

東城会直系真島組の組長。

神室町ヒルズ建設事業責任者。

元東城会四代目桐生一馬の永遠のライバルで、何度か桐生と死闘を繰り広げた。

三成とも何度か戦ったのだが、三成の力には及ばず、あっさりと完敗をしてしまう。（この話はまたいつか）

三成を認め、今回のIS学園での三成観察および護衛（本当は。IS学園に入りたかっただけ）を受ける。

力はあるが、知能はあまりない。

武器：ドス ショットガン（Mark IV・EXP）

好きなもの：ゾンビ映画、素直な人、自由気まま、強いヤツ

嫌いなもの：認めない者の命令、暇

称号

【超武闘派極道】

東城会から恐れられている狂犬

【三成監督役】

三成を守るためにIS学園に入る。仲がいいのですね

堂島大悟^{どうじまだいご}

桐生が昔いた堂島組堂島宗兵の息子。

桐生の後を継ぐべく、東城会六代目として東城会を支える。

桐生から絶大に信頼されており、大悟もその信頼に応えようとする。
構成員たちを率いるカリスマ性を持ち合わせており、人望は三成と
同じぐらい厚い。

好きなもの：不明

嫌いなもの：不明

称号

【東城会六代目会長】

役三万人の構成員をまとめる長

【遊ばれ人？】

真島に女装させられた歴史がある。「真島さん…やめていたきた
い……」

猛獲^{もうかく}

その全てが謎の人物。

三成と同じ子孫者の一人で、中国の南蛮王猛獲の子孫

【用語】

子孫者：三成たち一騎当千の武将達の子孫のこと。
生まれつきの高い運動能力を持ち、普通の人間で対抗できるのはごくわずか。

細胞覚醒：子孫者たちが持つている特殊な細胞が覚醒すること。
覚醒の条件は人それぞれだが、子孫者の感情に干渉しているため、『怒り』『悲しみ』などで細胞が覚醒する。
覚醒すると、5つの力が体に宿る。

一騎当千の力：細胞覚醒により宿る絶大な力。
文字通り向うとこ敵なしの力だ。

アクセルモード：細胞覚醒で宿る力
子孫者の力を倍増させる力。
レベルにより、2倍3倍になるが、使いすぎると体に負担がかかる。

詠唱術：細胞覚醒による不思議な力。
子孫者の武将により、力が変わる。
例：『炎獄の炎』『自然の地』『青い雷の雷』『豪流の水』『烈風の風』…… などなど

東城会：関東一円のヤクザを束ねる一大組織。
構成員約三万人をしめている。

現在は大悟が六代目として東城会をまとめている。

エンジェル・ハーツ：三成が所属しているロシア軍の特殊部隊。
主にはロシア軍の方針を手伝いながらテロ対策、クリーチャー討伐などをしている。

6話「大切な人」(前書き)

遅くなりました。ごめんなさい。
ちよつと短めです。

6話「大切な人」

三成が倒れた次の日。

「しっかし、みっちゃんがやられるとはのう……」

三成が倒れた後、三成は真島に発見され、保健室にて治療したのだ。
った。

三成の体は軽い火傷で包帯でグルグル巻きにされていた。

「もうこいつがミイラにしか見えんようになってもうた……」

「ま、真島さん……」

隣りにはヤクザ風の男がいた。

どうやら、大悟の事で話しをしていたらしい。

「で、六代目は？」

「は、はい……腹に何発かくらったんですけど、意識を取り戻しましたわ」

「そつか……とりあえず、安心や」

真島は椅子に座る。

「せやけど、今の東城会は不安定やろうな」

「六代目は今は死んだも同然。三成さんもこの様じゃあまとめても

らうのは無理でしょうね。」

「いや、みっちゃんが治っても、東城会をまとめてもらうのは無理や」

「なんでですか!？」

「こいつも狙われとるんや。しかもみっちゃんはこの様。みっちゃんが勝てんかったやつをわしらで対抗できるか？」

「うつ……」

「せやから、東城会は真島組の連中でカバーしろや」

「へい……」

〓3日後〓

「ん？」

目を覚ますと、そこには見知らぬ天井……でもないが、保健室の天井があった。

「いてて……」

体を起こすと全身は包帯だらけ。その時、俺は悟った。

「負けたのか…」

『無様にな』

石田は皮肉のような顔で俺を見る。

「なんだよ…あざ笑いに出てきたか？」

『別に。ただ、お前はまだまだ力が足りなかった。それだけだ』

説教かよ…。

石田はそれだけ言つと俺の前から消えた。

「なんだかなあ……」

しかし、大悟は大丈夫なのであろうか…？心配だ。

「南蛮王…猛獲…」

俺は右手を強く握りしめる。

「今度は勝つ…!!」

「食堂」

「あゝあゝ体が重い」

俺は全身包帯だらけなのだが、腹がすいていたのだ。よく言うではないか

腹が減っては戦はできないって。

今現在6時30分である。さすがにこんなに早い時間に飯を食っている人間は…

「よう、みつちゃん！」

「み、三成さん！」

いたよ…真島さんとオルコットだ…。

「体はもういんか？」

「ああ、まだ少し痛むが鍛える分では別に問題はないだろう。それより二人はこんなに早い時間から何を話してんだ？」

「いやな、セシリアちゃんがお前の昔話を聞きたいっちゅうから話しとっただけや」

「ま、真島さん……¥¥¥¥¥」

俺の昔話？何でそんなことを聞きたがるんだ？
あと、なんで赤くなるんだ？

「いやゝ！青春っちゅうもんはいいのゝ！」

俺はもうそんな年じゃないがな…。

「真島さん…まさか、余計なことをいったんじゃ…」

「大丈夫やて！」

どうだか…

「お前の今の置かれてる状況と20年前の話」

「それを余計なことって言うてんだよ！！」

ただでさえ俺は歳のことを公開してないんだ！それを勝手に…。

「わ、私も最初は驚きました…石田三成…っていう人の子孫だったなんて…」

「いや、俺はそんな大それた…」

「しかも、20年前、苦しいことが…」

「まゝじゝまゝさんゝ！！！」

もう余計って言うより全部話してんじゃねえか！

「い、いや…口が…の？」

「んじゃあ、今からその口を削ぎ落としましょう」

俺は片手にナイフを持ちながら言う。

「ま、待てーや！あの子の事は言っていないんやから！-」

「……」

その言葉は、俺の胸を突き刺すような痛みが走った。

「チッ……」

俺は、小さく舌打ちをして、ナイフをしまった。

あの時…俺がしっかりしてれば…。

三成は食堂を無言で出て行ってしまい、二人はまた残された。

「真島さん…その…『あの子』って言うのは…」

「あん？。そうやなあ……あいつは、自大切な人を失ったんや」

「えっ？」

「俺が話せるのはここまでや。後は本人に聞け。それを聞ける覚悟があるんならな」

「それは…」

「まあ、惚れた奴のことは知りたいのは当然や！。でもな、あいつの傷は簡単にはなおらんやろうな」

7話「出陣！中国の戦い」

なんか、俺が寝ている間に代表者が一夏に決まったらしい。
オルコットは、どうやら棄権したらしい。

「なあ、オルコット」

「は、はひっ!？」

びつくりしたのか、ビクッと肩をふるわせる。

「い、いや……なんで代表者の決戦を棄権したんだ？」

「そ、それは……」

なぜか顔を赤くするオルコット。

「みつちゃんよ……乙女の事をそんなに聞いてやるなや」

「え???」

意味がわかんないんだが？

まあ、言えることは一つだ。

「深く関わんなってことな」

「そうつことや」

まだ顔を赤くしながら、オルコットは下を向いている。

「どうした？オルコット？」

俺は少し心配になり、オルコットの顔を覗き込む。

「ひゃっ！？な、なんでもありません！！」

びっくり仰天とはまさにこのこと、オルコットはびっくりして飛び上がる。

俺までびっくりしてしまった……っていうか、まだ俺はまだ何も言っていないのだが…

「まあいい……昨日の敵は今日は味方。よくある話だ」

俺は手を前に出す。

『素直じゃないな……』

うっせ…

「これからよろしく頼む」

「こ、こちらこそ¥¥¥¥¥¥」

オルコットは俺の手を取る。

「いやゝ。初々しいのうゝ」

俺は、真島さんの言っていることがよくわからず、少し考え込んでしまった。

「いったい、真島さんは何が言いたかったのだ？」

「今田」

そこに、俺の考え事を妨げるか如く、織斑先生がまたもや受話器を持って現れた。

「電話だ」

「はいはい。」

「もしもし？」

「……うん……うん……」

「その話、本当か？」

「わかった。今すぐ」

「なんや？どこに行くんやみっちゃん」

「出陣だ。場所は……」

現在：中国

11:24

それは、何事もない日常のことだった。

中国のとある空港で、テロにあったのだ。

テロはミトコンドリアウイルスに感染しか化け物を放つ。

空港は現在閉鎖され、空港の中にはまだ何人が残されていた。

「守りを固めろ！」

「死にたくなかったら撃て！！」

空港の中は軍人たちが必死に出口を死守している。

現在、この騒動での死亡者は200人は超えた。

「クソッ！こいつらはなんだ！？」

「撃つても撃つてもキリがないっ！」

クリーチャーは走って兵士たちに突っ込んでくる。

「来るなあ！！」

ダダダダダダ！！

どんなに撃つてもクリーチャーは止まらない。

「全軍、退却！！」

そして、空港は地獄と化した。

「クッソ！何なんだ！あの化け物は！倒しても倒してもわいて出てくる…」

「少佐、ロシアに助けを求めてはどうでしょう？」

「何を言う！ここで負けていては、中国の名折れだ！」

「じゃあ、このまま抗い続けるか？」

そこに、一人の男が現れた。

「誰だお前は」

「日本のクリーチャーハンター。
今田三成」

「く、くり…なに？」

「出撃命令が下ったから手伝いに来たんだよ」

「私たちが潜入するのは空港の北口です。東と西はほぼ奴らに制圧されたので、入口はここしかありません。あとはチームですが…」

「俺一人で十分だ」

「『えっ！？』」

三成は二丁銃を出し、テントから出ようとする。

「ま、待ってくれ！」

いくらこの件のプロでも一人は無理だ！

第一、中にはたくさんクリーチャーがいるんだぞ！？」

「じゃあ、アンタ来いよ。」

考えてみるよ。みんな激戦で衰弱しきつてる。

こんな士気がガタ落ちした奴らを連れていったところで、足手まといになるだけだ。

ちなみに、アンタは全然汚れとか付いてないようだし、体力はある

「んだろ？だったらアンタを連れていった方がいいわなあ…」

三成は冷たい視線で少佐を見る。

その視線は、氷よりも冷たいものだった。

少佐は痛いところを突かれたのか、言い返せない。

「…アンタらは兵士たちの気力が回復次第に西口に戦力を集中させてくれ。」

俺は逃げ遅れた奴を連れて、手薄になった東から出て、そこから俺も参戦する」

「わ、わかった…」

「んじゃあ、あとはよろしく頼んだ」

現在は19:00俺はヘリで、今手薄な北口から入ることになった。なぜ、俺が駆り出されたかというと、それは今日の朝に会った電話であつた。

『その話、本当か？』

『ああ、どうやら中国の代表候補性がその空港にいるらしいんだが…三成。お前行ってくれ。』

私はやれ会議だやれ軍事方針で忙しいんだ』

ということだ。なぜ本部ではなく、俺になったのかはわからない。だが、任せられた以上は尽力するしかあるまい。一応、ロシアにはそれなりに恩があるからな。

俺の前にはどうしてもついてきた兵士二人がいた。二人ともなんだかガチガチになっていた。もしかして……

「お前ら新人か？」

「あ、わかりますか？」

まあ、これまでも色んな兵士を見てきたが、こいつらはわかりやすく、認めで分かった。

「実は……今回は初の実戦で……」

「初めての实戦がまさか、あんな化け物が相手で……少したまげました」

一人はへへっ……と無理に笑みを浮かべる。わかるが……

「どうする？お前らは残って……」

「大丈夫です！」

「自分らは軍人として国に忠を尽くします！」

……国に忠をねえ……

「別に国に忠を尽くすのはいいが……命は大事にしる？」

あと、俺がこんなこと言うのもどうかとおもぅが……愛国心だけではどうにもならんぞ？」

「「なっ……………」」

「俺の大事な人が言っていた言葉だ。」

『兵士は、国に忠を尽くすのが大事なのか？兵士が大事にするものは、自分に忠を尽くすことじゃないか？』」

「「……………」」

「国のために死のうとしたら必ず死ぬ。だけど、逆に生きるために戦えばいきり帰れるもんだ。」

ま、俺が言えることじゃないが……」

「どうということなんですか？」

「……………俺も長く生き過ぎたってことさ」

「「????」」

人はいつか死ぬ。だが……俺は人の数倍生きてしまっ。こんな身体……

『一言言おう。その体はお前が望んだもの。嘆くんなら今すぐにも……』

こんなところで死ぬるか……それに、今はあの猛獲とかいう奴ことが気になるしな。

だが、今は任務のことを考えよう。

「着いたぞ」

俺は一足先にロープウェイで下に降りる。

「これより、ミッションを開始する」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6695t/>

IS - インフィニット・ストラトス - 伝説を継ぐもの

2011年10月24日23時06分発行